

## 唐末杭州における都市勢力の形成と地域編成

山 崎 覚 士

### 要 旨

唐後半期以降の地域分節構造は、地域と都市に何をもたらせたのか。本稿では特に、唐末における浙西・浙東地域の都市に見られた武装勢力の特質について考察する。長江デルタの南端に位置する杭州では、黄巢の乱という社会不安を受けて武装勢力の結集が見られた。それは当時発達していた運河と支流上や、それに連繋する塩業務機関の置かれた都市に見られ、武装勢力は相互に連合を図り、婚姻関係を構築している。一方で浙東地域では、山間部において武装勢力の結成が見られるものの、山間立寨という個別分散的な配置にとどまり、むしろ県城などでは流賊の流入が見られた。杭州に形成された武装勢力はその強固な連合を基礎に拡大し、流入流賊の排除を通して浙東地域を併呑することとなり、やがては杭州を中心として浙西・浙東地域が再編成されることとなったのである。

キーワード：運河、钱塘江、武装勢力、杭州八都、山間立寨

(2005年10月5日論文受理, 2005年12月2日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

### はじめに

安史の乱を分水嶺として分期される唐代後半期以降になると、唐朝の統治空間に「辺境—王都—長江下流連結」の大きな地域分節が成立したとされる。この地域分節について妹尾達彦氏は、「辺境—王都—長江下流連結」とは、西北部軍事前線が、王都を媒介に長江下流域（江南・江淮）に連結する政治・経済組織のことであり、八世紀後半以降の王朝の主要財源地としての長江下流域の登場が、この政治・経済組織の前提」であり、「唐朝の長安と洛陽の両都の都市構造や、既存の行財政機構自体が、この「辺境—王都—長江下流連結」の影響をうけて変化していった」<sup>1)</sup>と述べる。

また佐竹靖彦氏は視点を首都と河南、江淮に絞り、「安祿山の反乱とそれに対する唐朝側の

対応の結果、既に見たように広大な唐朝の支配領域の中核部分に、長安と洛陽を頂点とし、河南をその武装装置の人的供給基盤とし、江淮を財政的基盤とする緊密な相互依存的な収奪関係が形成された。このような社会関係を其の基礎に於いて支えていたのは、黄河、済水、淮河長江を通じる公的、私的な商品流通であった」とし、当時の大運河を軸とする公私の経済活動によって連結された首都—江淮地域と、その間に人的供給地としての河南地域を介する地域分節を論じた<sup>2)</sup>。

以上の視点を踏まえ山根直生氏は近年、地域分節とその連節の様態を「地理的臓器群（地理的器官群）」と独自の言葉で呼ぶが、意味するところは地域の独自性とその有機的連結であり、以上のような国家の地理的様態に対する注意を喚起する<sup>3)</sup>。

以上のように唐後半期の地域情勢として、「辺境一王都一長江下流連結」（あるいは「軍事（河朔）一政治（河南）一財政（江淮）」）の分節構造が指摘されつつある。このうち、西北部軍事前線については軍事や財政方面に関して研究が進められている<sup>4)</sup>が、こうした分節構造を見据えた江淮地域の分析はさほど進んではいない<sup>5)</sup>。上記の地域分節の成立は、当然ながら長江下流域以南の社会にも影響を及ぼすはずであり、経済基盤あるいは主要財源地としての江淮地域の成立は、地域内にその経済活動、特に租税運搬や商業行為を支える大運河を主幹とする交通網の整備拡張を促すことになる。また、中央政府の財源のうち、塩税に重心が置かれることによって塩業務機関の整備が進み、運河に繋留するための小規模運河（運塩河など）の整備も進められる。このように、物資の恒常的な運搬の必要性は地域内に毛細血管のごとく交通網を張り巡らせ、かつその交通網上に商業行為が展開し、やがては同地域における唐末五代の情勢を形作ることとなる。

しかし長江下流（あるいは江淮）といっても、淮河流域の低地氾濫平原部、長江南部（浙西）の低地デルタ部、钱塘江以南の山間高地部（浙東）などは地理的形狀を大きくことにし、そこに根付く社会形態もまた異なり<sup>6)</sup>、一括して扱うには危険である。そこで本稿では、江淮地域でもそのうちの浙西と浙東における唐末の地域的特色を考慮に入れ、両地域がその地域的特色からどのように地域勢力を形成して呉越国へと受け継がれるのかを考察の対象としたい。特に浙西地域の最南部に位置する杭州では鎮を中心とした政治権力が編成され、浙東地域を支配するという形で地域編成が進むことになる。その過程はまさに、唐後半期に分節された長江下流域内の諸地域形態の特質を反映するものであり、地域分節についての究明の糸口となるだろう。またその解明は唐末から五代を経て宋代にいたるまでに、地域（中間領域<sup>7)</sup>）がどのようなプロセスを経て形成されていくのか<sup>8)</sup>を明らかにすることにも連なっている事に触れておきたい。

## I 杭州初期勢力とその立地

乾符五年[878]夏、浙西・浙東地域は黄巢の乱の煽りを受け、その余波に対応するため杭州近傍の都市群はそれぞれ武装集団を形成し、相互に連繋して在地の防衛と治安維持を担った。杭州八都（臨安、钱塘、富春、新城、餘杭、塩官、龍泉、臨平の鎮）と称されるこの武装集団についてすでに明らかにされた部分も多い<sup>9)</sup>。なかでも佐竹靖彦氏の研究で本論とかかわる箇所について、「（杭州八都は）東北は運河に沿って、……西南は浙江をさかのぼって」立地し、「当時の主要な交通路にそって」成立しており、「在地有力者たちの結合と財力を基盤に編成され」、「兵力の内容は直接的な生産関係をこれらの土豪（在地有力者）層との間に結ぶ佃戸達ではなく、「没落下層農民や商業労働者を重要な成分とし、その下部には一層こうした要素の強い傭兵軍として成立」（カッコ内：山崎）していると指摘し、杭州八都が水系を主とする交通路上に下層民を糾合して成立していることを明らかにしている。本論は佐竹氏の説を踏まえつつ敷衍し、かつ新たな点を論じたい。その際に八都については先行研究に譲り、のちに増設された十三都などの杭州初期勢力の基盤となった諸勢力を分析対象（880—887年）とする。杭州八都は広明元年[880]（或いは乾符五年[878]）に、それまでに形成されていた石鏡鎮を中心に武装勢力として形成・結合された（地図参照）。そしてほどなくして十三都となって拡大し、光啓三年[887]に石鏡鎮の副将であった錢鏐が杭州刺史となる。そこでこの間の時期を初期、そして錢鏐の杭州刺史就任後、越州の董昌を伐つ乾寧三年[896]を中期、それ以後開平元年[907]までを後期として行論していく。

まず十三都に数えられる義和鎮について。『至元嘉禾志』卷一、沿革には、

黄巢の乱するや、豪傑義兵を起し、郷井を保護し、遂に陞して義和鎮と為す。餘杭の呉公約は董昌に随い巢を西鄙に禦し、奏して都額を硤石に置く。兼ねて義和鎮遏使を授く。後、其の子重裕は西佳鎮遏使兼義和鎮事を襲拜す。

とある。義和鎮は杭州より運河を東北へ上り嘉

興へと向かう中間に位置し、後には崇徳県へと昇格する運河要衝の地で、黄巢の乱に際して呉公約が義兵を起こして成立した。

また呉越国時代のこととして、『光緒嘉興府志』巻五一、嘉興孝義伝に、

薛仁徳は、呉中戎府の右職なり、倜儻にして施しを好む。崇徳堰を過り、牽船人の多荷校会するを見る。令佐来謁す。因りて之れに問う。対うるに路は当に要所に衝り、秋税を通ること甚だ多く、堰役夫は皆な是の物なるを以てす。仁徳は実に欠くるは幾何なるやを問う。令は具に籍もて之れに呈し、九千七百餘緡を計う。仁徳は囊中より金を出だし、数の如く之れを償う。遂に纜を解きて去る。

とあって、蘇州の軍職に就いていた薛仁徳なる人物が義和鎮（あるいは崇徳県）の崇徳堰に差し掛かったところ、積荷チェックを行なっているのを目撃し、下級吏はここが要衝であり、（積荷チェックしたところ）秋税の脱税が多いと嘆息している。この史料から、義和鎮の運河に設けられた崇徳堰が税物の集散する要所と見えている。ゆえに杭州初期勢力の一つである義和鎮も佐竹氏の言うとおりに、運河に連繋した鎮であり、しかも直接運河上に立地したことが確認される。

また『浙江通志』巻二三五、唐民部尚書呉公約墓附注によると、

羅隱呉公約神道碑にいえらく、黄巢の將に叛せんとするや、天の豪傑、挺を挙げて以て郷里を衛る者八人、故に八都の号を立つ。其の間王公節將、派れて分有る者一十三都、君は其の一に居る。君諱は公約、字は処仁、餘杭の人なり。胆略を以て郡邑の推すところと為り、西討に応募し、西佳鎮遏使を授かる。其の後董太尉に従い、御史中丞を加えられ、奏して都額を置き、硤石を改めて郡邑の所と為す。

とあり、義和鎮將の呉公約が硤石に都額を置いて「郡邑之所」としたとする。この「郡邑之所」は『十国春秋』巻八五、呉公約伝では「訓兵之所」とし、硤石に兵隊の訓練所を設けたとなっている。いずれにしても、呉公約によって新たに人の集散する硤石都が設けられた。この硤石

はやがて杭州と嘉興を結び、近傍の県・鎮とを連結する水路交通の要所となり、南宋代に巡檢司、元代には税務、明初には税課局兼河泊所が置かれるようになり、現在の海寧市となる。

次に臨平について見ておきたい。佐竹氏は嘉興の東に位置するとしているが、やはり臨平鎮（現在余杭市、臨平山のふもと）とすべき<sup>10)</sup>であろう。そしてこの臨平には塩業務機関である臨平監が置かれていた。『新唐書』巻四一、地理志、江南には、

杭州、……臨平監・新亭監塩官二有り。

と記し、また『輿地紀勝』巻四〇、淮南東路泰州に引く『元和郡県志』に、

元和郡県志に云えらく、……今海陵県に官塩監一を置く、歳ごとに塩を煮ること六十万石。而して楚州塩城・浙西嘉興・臨平両監、出だす所は焉に次ぐ。

と見え、臨平・嘉興には塩監が置かれていることに注意したい<sup>11)</sup>。

また先ほどの『新唐書』巻四一に見えた新亭監（塩監）は塩官にあった<sup>12)</sup>。顧況『華陽集』に附す顧況伝（海塩姚士麟撰）には、

顧況、字は逋翁、蘇州海塩の人なり。……嘗て新亭監を知せんことを求む。監は塩官の海瀕に在り。人或いは之れを詰す。況曰く、余は海中の山を貌るを要むるのみと。

とあり、新亭監が濱海（錢塘江岸）に位置していたことがわかる。当時の錢塘江は現在の流域と大きく異なり、今は杭州市蕭山区として内陸化している龕山と赭山の間を流れていた。塩官県城も現在はすぐ南に錢塘江が肉薄しているが、当時は四十里近くの隔たりがあったとされる<sup>13)</sup>から、新亭監は県城から南に離れた錢塘江岸にあったのである。

以上のように臨平・嘉興・塩官は、大運河から枝分かれして立地し、かつ塩監がおかれていた<sup>14)</sup>。また杭州にも塩場が設けられていた<sup>15)</sup>。さらに杭州初期勢力の中心者である錢鏐も販塩の徒と伝えられ<sup>16)</sup>、会稽県の跳山は錢鏐が私塩を販売し、官兵から跳んで逃れたことから命名されたという俗伝が残っている<sup>17)</sup>。ここから、大運河という幹線水路に連繋する塩業務機関を、在地の私塩商人などの実力者が支配し立都して初期勢力を形成したとみなすことが許され

るだろう。ほぼ同時期に唐末揚州において節度使権力に寄生した呂用之集団も塩業務機関を押さえて基盤形成を図っており<sup>18)</sup>、唐末当時において、幹線水路とそこに分置される塩業務機関に武装勢力が形成される傾向を見て取ることができる。

つぎに激浦鎮について見てみたい。鎮の設置は開元五年[717]張延珪の奏による<sup>19)</sup>が、唐末になると屠瓌智が鎮将となって杭州初期勢力に加わった。『全唐文』巻八九八、皮光業「屠將軍墓誌銘」によれば、

將軍姓は屠氏、諱は瓌智、字は宝光、其の先河東の人なり、……大父某は地を呉に避け、激川の青山に家し、遂に世よ蘇州海塩の人と為る。……呉越国王初め郷兵を起こし黄巢を拒み、將軍は之れに従う。時時籌画を以て進め、遂に幕府の謀議に与す。

と記し、また光緒『嘉興府志』巻四、市鎮に、  
激浦鎮、……呉越錢氏鎮遏使を置き、是を以て土豪傑管領す。

とあって、屠氏は激浦に移住し在地の有力者となり、鎮遏使として初期勢力に参画していた。鎮が発達し市舶司の設置にいたるのは南宋のこととなる<sup>20)</sup>が、当時の激浦も宋代以降に見られるような、錢塘江北岸での海上交易の一拠点としてあったと見られる。また激浦北部の乍浦にも鎮遏使が設けられた<sup>21)</sup>とされる。杭州初期勢力には錢塘江河口の北岸に位置する海上交易拠点の勢力も含まれていた。

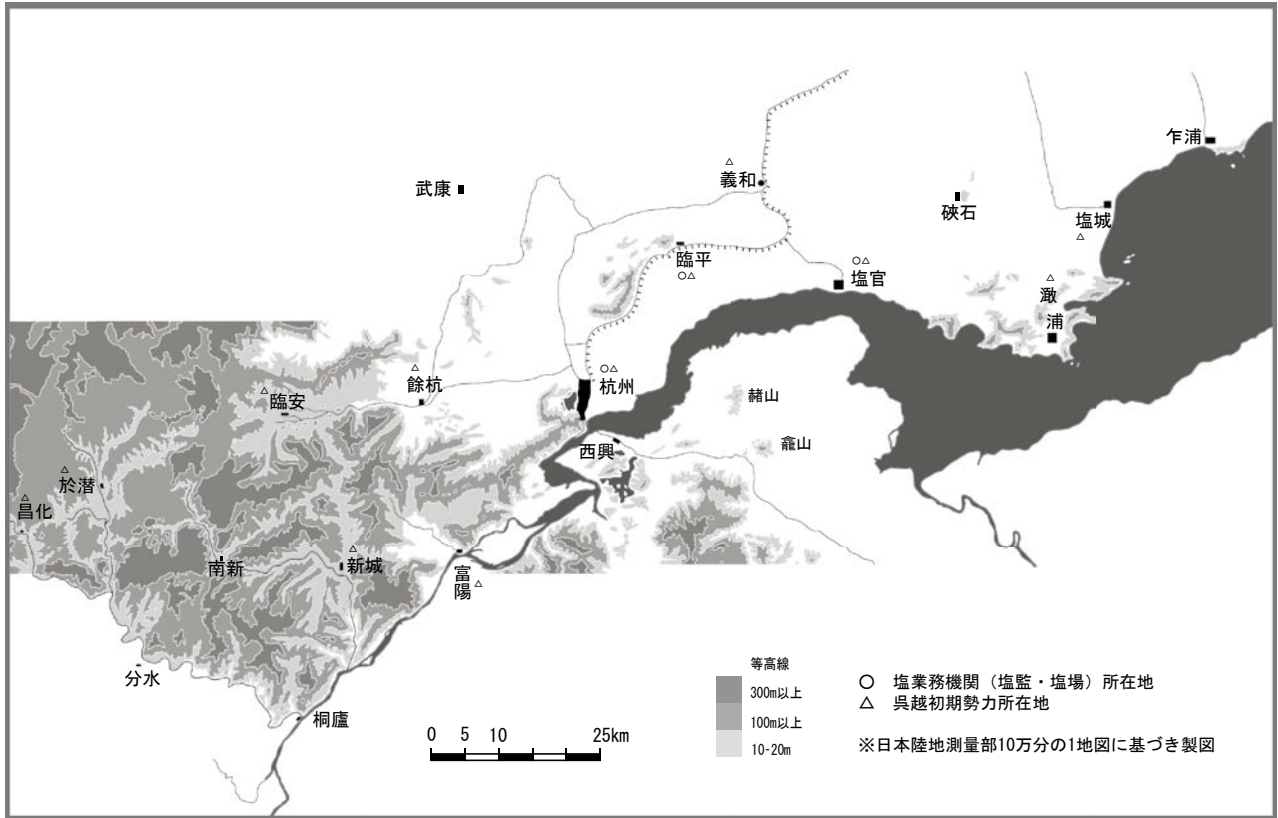
少しまとめれば、杭州八都からはじまる杭州初期勢力は、大運河と錢塘江で結ばれる水系の重要拠点に立地したが、なかでも運河周辺の塩業務機関の所在地に見られた。また運河—錢塘江ラインのみならず、河口の交易拠点をも含んでいる。裏返せば、当時の塩業務機関のもつ利潤や、運河—錢塘江上の交通利便性を背景として諸地域で武装勢力が形成され、相互に連繫を生みより大きな勢力を形成していたことを表している。杭州初期勢力は、運河という一大幹線とそれに連繫する塩業務機関、また錢塘江の河口から上流にいたる交通ルート<sup>22)</sup>を諸武装勢力連結の契機としてもっていたのである。

唐後半期より運河や塩業務機関が整備され、江淮地方は中央政府の大半の財賦を負担するこ

ととなった。それによって浙西道では南北に貫通する大運河を軸に巡院・塩監・塩場などの塩業務機関の設置がうながされ、運塩や兩稅斛斗の上供などを担う漕路・商業ルートが道内で発達していた。官船や塩商人（一般の商人も含まれたであろう）はそうした商業ルートを日常的に往来したが、結果として地域に不可分の連帯意識をもたらせたと考えられる。杭州初期勢力も、そうした地域のもつ連帯性を背骨としながら形成された集団であった。

ただ問題として、十三都に数えられる於潜・昌化の鎮は大運河—錢塘江上流の幹線からはずれ、水系上では天目溪・紫溪に連繫していた<sup>23)</sup>。水系では杭州城と明確に区分される<sup>24)</sup>。天授二年[691]には於潜の租税を運搬するに際して、臨安より東に流れる苕溪を利用するよう勅が下っている<sup>25)</sup>が、於潜と臨安の間には天目山が聳えるから、陸路による交通が目指されたと思われる。ただ、のちに於潜と新城の中間に位置する南新に税場が置かれ、租税運搬の便を図っている<sup>26)</sup>から、於潜からは南新へ出て葛溪を下って新城に出るか、あるいは南新から山谷を抜けて臨安に向かう陸路も呉越国時代になって見られたかもしれない。こうしたことから杭州初期勢力の形成には、塩業務機関の存在や水路交通の利便の少ないところでも武装勢力が形成され、一部の山間交通によって連繫し杭州初期勢力の基礎となっていたことも指摘しておく必要がある。

光啓三年[887]一月に杭州刺史に任ぜられた錢鏐は、浙西節度使の管下に置かれることになる<sup>27)</sup>。ところが三月には潤州で軍乱が起こり、節度使周宝が駆逐された。錢鏐は杭州初期勢力を連れて潤州へと行軍を開始する。行路は太湖の西側を通過して常州・潤州を下し（887年12月—888年1月）、その後、江南河を南に下って蘇州を下し、一時江南河を支配するまでにいたった。だが、のち淮南楊氏に江南河上流の潤・常州を奪われ、江南河全体の支配は頓挫することになり、その矛先を浙東地方へ向けることになる。杭州初期勢力の浙東支配過程はⅢ章で見ることとし、次章では杭州初期勢力の結合紐帯について明らかにしたい。



杭州勢力分布地図

## II 杭州勢力の結合形態

杭州の諸武装勢力がどのような紐帯によって結合し、勢力形成したかの分析はいまだない。穴沢彰子氏の論のように、武器供与のネットワークによる結合<sup>28)</sup>も想定できるが、杭州初期勢力の場合、より現実的には武力勢力間で姻戚結合が行なわれていた。

表1は杭州初期勢力間で姻戚関係の判明する者を挙げ、図1は表1に基づき作成した。図中の番号は表のNo.である。こうして見れば、残された僅かな史料ながら初期勢力間（一部中期も含む）での姻戚関係が多く見られることが判然とする（臨安No.1・新城No.2・餘杭No.3・臨平No.4・富陽No.5）。

No.4曹仲達の事例によれば、父曹圭は初め富陽の陳詢の娘に曹仲達を娶わせようとしたが、錢鏐が娘を娶わせることになるなど、諸武装勢力間で姻戚関係の構築が目指されていた。No.6屠瓌智の子屠龍驤の娶った聞人氏は稀有な姓だが、富陽鎮将の初代が聞人宇であり、なんらか

の血縁関係の存在が想起される。またNo.7杜雄はもと草賊上がりで台州刺史となるが、董昌が越州節度使となると、錢鏐と通じるようになり、やがて錢鏐と董昌の戦いの中で、錢鏐側となって董昌を討った。杭州初期勢力が錢鏐中心に結集され、両浙支配を進める過程での戦略として、錢鏐と杜雄間の姻戚関係が構築されたと考えられる。

また塩城で武装勢力に加わっていた朱行先の墓誌銘を見ておきたい<sup>29)</sup>。この墓誌銘によれば朱行先は、初め塩城の建寧都に加わり高彦に従った。朱行先は917年ごろ静海鎮（定海鎮、のち定海県）に赴任し、そこで諸暨鎮遏使韓章、明川羅口使（明州羅城使）陳師靖、上亭鎮<sup>30)</sup>遏使翁錫・上亭鎮遏将翁元昉など、明州を中心とした地域で姻戚関係を結んでいる。この上亭の翁氏について、『吳越備史』卷一、開平三年[909]六月戊申条附註に、

王の句章（明州）を巡るや、餘姚丈亭鎮に行次す、舟巨石に湊り、進む能わず。既にして大雨震雷し、二龍有りて王舷の下を負う、

表1 杭州勢力血縁関係表

No.	名前	出身地	役職	備考	史料
1	錢 鏐	杭州臨安県	石鏡鎮副将[875]→杭州都知兵馬使[881]→杭州刺史[887・1]→鎮海節度浙江西道觀察処置等使潤州刺史[893・9]→鎮海鎮東等軍節度使[896・10]		備史1, 旧133錢鏐伝
2	杜 稜	杭州新城県	武安都將[880]→常州制置使[887・12]→潤州制置使[888・1]	父稜, ……初八都建, 稜率郷党, 以武安為号。時武肅王輔董庶人, 起石鏡鎮, ……稜遂歸于我。光啓三年, 命征薛朗平之, 遂為常州, 尋遷潤州。	備史4, 乾祐三年[950]二月甲午附杜建徽伝
	杜建徽	杭州新城県	武安都將[887・12]	睦州刺史陳詢叛錢鏐, 挙兵攻蘭溪, ……武安都指揮使杜建徽与詢連姻, 鏐疑之, 建徽不言。	通鑑264, 天復三年[903]七月
3	陳 晟 陳 詢	杭州餘杭県	清平鎮將→睦州刺史[887?]	詢, 即晟之弟, 餘杭人也。八都建, 称清平鎮將, 因侵睦州, 而刺史章緒称疾, 以州付之。晟在郡十八載而卒。子紹權嗣, 詢默紹權而自立。	備史1, 天祐二年[905]十二月付伝
4	曹 信	歙 州	臨平鎮將[880]→知嘉興監事	省略	備史3, 天福八年[943]十一月附曹仲達伝
	曹 圭	杭州臨平鎮	嘉興都將→蘇州刺史[898・10]	光化元年十月, 王以嘉興都將曹圭為蘇州制置使, 尋命為本州刺史。	備史1
	曹仲達	杭州臨平鎮		圭在姑蘇時, 与仲達求婚于睦州陳詢, 及將逆, 卜之, 曰, 陳氏親必不就, 当聘他門, 由是榮貴。既而途由国城, 武肅王見而奇之, 乃以王妹儷焉。	備史3, 天福八年[943]十一月附曹仲達伝
5	成 及	杭州錢塘県	靖江都將→潤州刺史[889・5]	乾符中[874-879], 代聞人字隸八都之一, 遂以富陽鎮称静(一作靖)江。……及因為子仁璠娶王女, 情好甚篤。	十国84, 成及伝。 備史1,
6	屠瓌智	蘇州澉浦鎮	澈川鎮遏使→越州指揮使[898]	省略……(董)昌誅, 以功授指揮使。……明年[898]春再遷越州指揮使。……娶錢氏, 子三。長龍驤, 授澈川鎮遏使, 娶聞人氏。次子昱, 節度使・銀青光祿大夫, 娶都虞候鎮遏使鄭公良女。三曰晟, 吳興刺史高公掌書記判官, 娶同里許氏。	全唐文898, 皮光業「屠將軍墓誌銘」
7	杜 雄	台州楊梅鎮	草賊→台州刺史	雄, 台州楊梅鎮人也。初与朱党・婁文俱為草寇, 婁文以雄為副。……漢宏署婁文知州事, 以杜雄知台州。……歸越, 董昌奏授雄為德化軍使。女四人, ……長適鎮海軍都指揮右揆吳章, ……次許嫁陳氏, 即口閩帥司空第二子, 次許嫁錢氏, 即今兩浙中令彭城郡王愛子也。	備史1, 乾寧四年[897]十月附杜雄伝『兩浙金石志』3, 唐台州刺史杜雄墓誌銘
8	馬 綽	杭州餘杭県	越州都指揮使→三城都指揮使	綽, 餘杭県人也。性氣淳直, 与王同事董昌, ……王因以従妹歸綽。綽尋隨董氏於越, 及董僭号, 綽棄家先奔于王。	備史1, 龍德二年[922]八月附馬綽伝



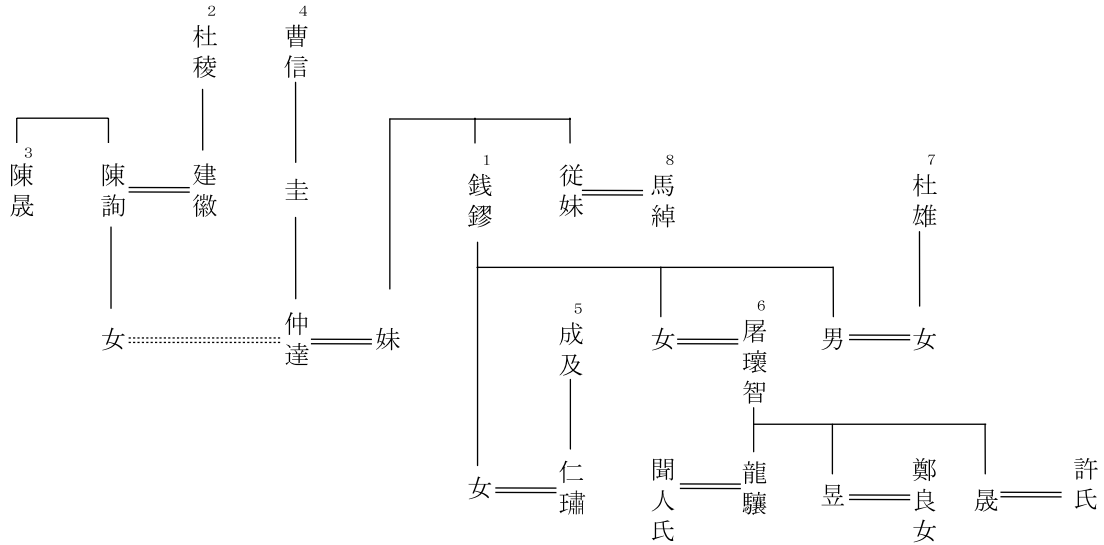


図1 杭州勢力血縁図

鎮遏将翁元軻舟を拽きて進む，二龍舷より升る。

と見えており，上亭鎮遏将翁元昉と（丈亭）<sup>31)</sup>鎮遏将翁元軻は同一人物か兄弟関係にあるものと思われる。そしてこの上亭は上記引用史料に見るように明州県城と越州餘姚県を結ぶ重要水路拠点であった。餘姚県の太平山から流れる慈谿江は餘姚県城を抜けて東へ流れた後，上亭にて二手に分流していた。南を流れる「大江」は明州城を経て海に注ぎ込み，北の「小江」は慈谿県を貫通し再び「大江」と合流したが，「大江」は海潮の影響を受けるため「小江」が利用されたという<sup>32)</sup>。ゆえに朱行先の姻戚関係を見た結果，そこにもやはり杭州初期勢力が運河—錢塘江上に結集され姻戚関係を構築していたのと同様に，明州と越州を結ぶ幹線水路上に姻戚関係が形成されていたことを窺い知るのである。

また墓誌にはさらに，おそらく明州静海鎮将となるに先立って，出自した建寧都内で建寧都虞候張全とも姻戚関係を持ち，また子の朱元杲は先に注意した聞人氏を娶っていることも記されている。杭州初期勢力から呉越国へ至っても，両浙支配を進めるなかで，姻戚関係が勢力結集に一定の役割を担い，かつそれは幹線水路上に展開していたことがより確固なものとなる。

杭州八都の発起者である董昌も姻戚関係を構築し，その関係性はある程度判明する。ところで，董昌は浙東節度使就任以後，やがて独立色

を強め羅平国を建国する<sup>33)</sup>にまでいたるが，五代王朝に信任された錢鏐によって一年で滅ぼされた。ゆえに反旗を翻したとされる董昌の姻戚関係について，史料は多く語らない。確認できるのは，董昌が浙東節度使に就任以後に福建の武装勢力へ食い込んでいる様である。以下同様に関係史料と図を作成した。

史料から確認できる限りでは，董昌は福建の武装勢力と姻戚関係を構築している。図表中のNo.b陳巖の妻は錢塘の范氏であり，董昌との姻戚関係も地縁が手伝って，構築しやすかったと推測される。また遠い姻戚関係でも援軍を依頼し，それに応じるという現実的効用を持っていた。『資治通鑑』卷二五八，大順二年[891]に，

福建觀察使陳巖疾病す，使を遣わし書を以て泉州刺史王潮を召し，授くるに軍政を以てせんと欲するも，未だ至らずして巖卒す。巖の妻弟都将范暉は将士を諷して己を推して留後と為さしむ。

同上卷二五九，景福二年[893]に，

王彦復・王審知は福州を攻むるも，久しく下らず。范暉救いを威勝節度使董昌に求む。昌と陳巖とは婚姻す，温・台・婺州兵五千を発して之れを救う。

とあり，福建觀察使陳巖の死後，姻族の范暉が跡を継いだ，王彦復・王審知に攻め立てられ，苦境にあった。そこで范暉は董昌に救援を求め，董昌も五千の兵を送っている。こうしたことが

表2 董昌血縁関係表

No.	名前	出身地	役職	備考	史料
a	董昌	杭州臨安県	石鏡鎮将[875]→杭州刺史[881・9]→越州觀察使[887・1]		備史1, 乾寧三年[896]五月附董昌伝。新225下, 董昌伝
b	陳巖	建州	団練副使→福建觀察使[884・12]	初, 黄巢転掠福建, 建州人陳巖聚衆数千保郷里, 号九龍軍, 福建觀察使鄭鑑奏為団練副使。泉州刺史・左廂都虞候李連有罪, 亡入溪洞, 巖擊敗之。鑑畏巖之逼, 表巖自代, 壬寅, 以巖為福建觀察使。巖為治有威惠, 閩人安之。……夫人錢塘范氏……子六人。長曰延晦。……次延美, 一子出身, 守閩県尉。……□適于太子正字董承和, 即制東 <sup>34)</sup> 廉問 相国之令子。	通鑑256, 中和四年[884]12月『閩中金石略』2, 觀察使陳巖墓誌銘
c	鄭鑑	? <sup>35)</sup>	福建觀察使		同上
d	杜雄	前表No.7を参照			

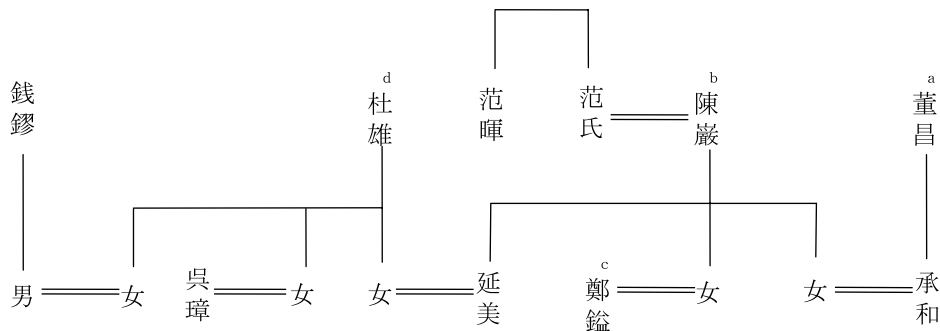


図2 董昌血縁図

ら、当時の越州と福州は海上航路によって相互に連携し、董昌の福建武装勢力への姻戚関係構築を促していたと見てよいだろう。

以上によって、唐末黄巢の乱を受け、杭州を中心とする交通網、とくに浙西の運河—錢塘江水路やそこに分置された塩業務機関に武装勢力が処々に形成され、相互に姻戚関係を構築して勢力基盤としていたと言えるだろう。かつこうした情勢は明州—越州水路上、さらには越州—福州海路上にも見られるのである。それは唐末浙西地域の都市において見られた武装勢力形成とその結合が当時の交通情勢とそこに展開した商業流通を背景としていたことを指示しているのである。

### III 浙東への進出

先に見たように、長江デルタの浙西地域においては、唐末の叛乱に対応して当時発達した幹線—支線水路上の鎮などの都市に武装勢力が形成され、かつ姻戚関係を実効的紐帯としながら諸都市武装勢力間の結合が構築されていたが、一方で中国大陸を駆け巡った黄巢反乱軍は各地に社会的流動をもたせ、浙西・浙東地域への流民の潮流を生むこととなった。その内には戦乱を避けた流民に加えて、反乱軍に参加し流動した流賊も含まれた。浙西地域では、杭州勢力が流入した蔡賊（河南汜濫平原の蔡州出身の流賊で、黄巢の残党）を武勇都という主力軍へ再編成し、勢力内への取込みが図られて



いる。一方の浙東地域では流賊が州城を占拠する事例が見られる。以下にその事例を見ておきたい。

『呉越備史』巻一、光化三年[900]九月条附王壇伝には、

壇、本と孫儒の隊将なり。其の党三千を率い睦州の陳晟に奔す、晟頗る之れを疑い、外城に処す。未だ幾くならずして、壇降党と三河鎮将陳巖を率い婺州を攻む。婺州刺史蒋環会稽に奔し、壇遂に其の地有り。

とあり、のちに婺州に拠った王壇はもと蔡賊で、三千人を率いて睦州へと入るが、のち婺州を攻めてその地を手にしていった。

また陳儒という流賊については同史料光化三年[900]九月甲午条附陳岌伝に、

岌、兄儒、本と黄巢の党なり、尋いで朝廷に降り、授かるに饒州を以てす。光啓三年、其の部伍を率い、…既にして徑ちに衢州に趨き、…自ら焉れに拠る。

と見えて、黄巢の党であった陳儒が配下を率いて饒州より衢州へと流入していた。

これらは流賊が浙東地域の州城へ侵攻し占拠する様を伝えたものだが、浙東地域の高地山間部ではその余波を受けて以下のような対応が見られた。明末清初の地理学者顧祖禹の『読史方輿紀要』から拾い出してみると、

武強山一唐末郷兵聚を此に保ち、黄巢を拒破す（巻九十、睦州遂安県）。

千頭湖一県南二十五里に在り。唐末黄巢境を犯し、義兵敵を拒み、賊党を誅すること千級、湖中に投ぐ、因りて名づく（巻九二、台州仙居県）。

寨 溪一府東七十里に在り。一名板沸溪、下流して永寧江に入る。相伝すらく唐末方將軍なる者有り、兵を駐して此に寇を撃つ（巻九十二、台州臨海県百歩溪）。

松 山一県南七十里に在り。相伝すらく唐末馬將軍なる者有り、寨を此に立て、以て黄巢を拒む（巻九三、婺州東陽県三邱山）。

烏舞巖一県南七十里。高五百丈、上寛平にして千人を容るるべし、唐末寨を此に置き、以て黄巢を拒む（巻九三、婺州東陽県）。

黄 山一甚高広たり、山下に断坑有りて路險峭

なり。相伝すらく邑人黄巢を此に拒む（巻九三、婺州義烏県黄蘗山）。

黄龍山一唐末盧約処州に拠る、施史君なる者有り、寨を山上に結び以て之れを禦す（巻九四、処州縉雲県）。

金石巖一其の巔万馬を容るるべし。唐の乾符中、邑簿張軻嘗て義兵を率い此に駐し、以て黄巢を禦す（巻九四、処州遂昌県唐山）。

玉巖山一黄巢の乱するや、郡人俞強復郷民を率いて焉に避く（巻九四、処州宣平県）。

と見える。これらの事例は、唐末の黄巢の乱を受け、浙東山間部において山地に「邑人」や有力者などが義兵を組織し、また寨を構えて防衛したことを伝えている。浙東山間部でも、浙西地域で見られたように在地防衛の必要上から武装勢力が形成されていたことを示すが、一方で武装勢力の立地が浙西地域のように県城・鎮などの都市に展開したのではなく、むしろ県城を避けて山間部へ逃避し、寨を拠点としたという相違を見出すことができよう。

この山間立寨について、後代の史料であるが具体的に見ておきたい。日比野丈夫氏の紹介する明代嘉慶年間の龔景瀚「堅壁清野議」には立寨防禦の具体的方策を述べる。

「山頂が寛平で男女万餘あるいは数千名をいれうるような地をえらんで寨を立てなければならぬ。……寨の築造はとくに險峻嚴重をむねとし、周囲には石塁を築き、外がわには壕を掘る。寨上には柴薪と水源のあるところが望ましい……指定区域内のものは老幼男女となくみなその寨内に入るのだから、当然、家屋を建てなければならぬ。食料はすべて寨中に運びこむ……武器は相当数の鉄砲を設備するほか、投げ石などを適当に集めておく。

寨の責任者として寨長を立てるが、それには資産もあり品行も正しく、知識経験に富んだ信望のある人、または紳士耆民をえらぶ<sup>36)</sup>。

この「堅壁清野議」は四川合州で白蓮教の乱に対応するために立議されたものである。明代の事例であるだけに武器の貯備に鉄砲が見え、また在地有力者に紳士が見えるが、その点を除けば概ね山間立寨の様子を伝えたものと言え

る。そしてこの「堅壁清野議」にみえる立寨次第は、先に挙げた唐末の立寨事情と近似している。たとえば立寨の場所を寛平の山頂に求めるが、唐末に婺州東陽県烏舞巖や処州遂昌県金石巖でも千人・万馬収容の地とある。石塁や壕の存在は不明にしても、山間立寨の一モデルとして唐末の事例にも想定しえるだろう。加えて台州臨海県寨溪のように、その名から溪谷に寨を構えたと見られるが、このような溪谷での立寨も多く見られたに違いない。

ただ温州州城では『呉越備史』巻一、天復二年[902]五月庚戌条附朱褒伝に、

褒、永嘉の人なり。兄誕、始め本州通事官と為る。寇乱に属し、兄弟皆な兵を聚めて、功を以て遂に司馬を撰す。副使胡燔の卒するに及び、乃を自ら抛焉れに。

とあって、朱兄弟が軍隊を形成しやがて温州を占拠しているが、稀な例と見てよいだろう。

山間立寨が見られた原因にはまず、浙東地域の諸県城に城壁が備わっておらず<sup>37)</sup>、防衛の観点からすれば無に等しい状況であったことが挙げられる。ただ城壁とはいっても山間州県城で見られたものは、恐らく土塁を連ねた粗末なもの（「土城」）であったり、あるいは木柵による囲いなどであり、実効性に欠けるものがほとんどである。ゆえにそもそもにおいて浙東地域の山間部における諸都市は防衛能力に欠けていた。

またより大きな相違点として、それらの武装勢力が山間部に寨を構え煙火を逃れるという性格上、諸武装勢力間での連繫・結合の契機に欠け、個別分散化傾向にあった。ゆえに浙東の山間部では武装勢力の連合が生ずることなく、先に見たように他郷からの流賊の進入を可能ならしめていたのである。ただ浙東居民のこうした山間逃避はやがて未開拓地の開拓へと連動し、宋以後の浙東地域の開発に連結することが示唆されるだろう<sup>38)</sup>。

さて、浙西北部の支配に挫折した杭州中期勢力を率いる錢鏐は、乾寧二年[895]二月に羅平国を建国したかつての上官の董昌を打倒し、乾寧四年[897]に鎮東の節鉞を受け、浙東地域の支配権を中原政府より付与された。しかし、当時の浙東地域の州城では先に見たように蔡賊な

どの流賊が割拠していたため、その婺州王壇、衢州陳炭（兄陳儒の死後、跡を継ぐ）の討伐を開始する。ところがこのような他郷流賊の排除の姿勢は、うちに抱えていた蔡州の流賊である武勇都の反乱を誘引した。錢鏐は天復二年[902]七月に杭州城で勃発した乱を九月には鎮圧に成功するが、同時に衢州刺史を任されていた蔡賊の陳章も反旗を翻すこととなった。結局、杭州後期勢力は、浙東地域を支配してゆく過程で蔡賊を完全に排除することになり<sup>39)</sup>、開平元年[907]五月には浙東地域の諸州城を下して支配領域化が完了し、同年呉越国の実質的な立国を迎えた。

杭州勢力は浙東地域を支配し呉越国へと昇華したのち、浙西地域も含めて県城の建設を行なっている。杭州の臨安県・餘杭県・於潜県・新城県・富陽県、蘇州海塩県、越州新昌県・諸暨県、明州定海県、台州州城、婺州州城・東陽県・武義県・浦江県、温州州城などであるが、特に浙東地域山間部の県城建設は、実効性はさておき、呉越国による治安維持と支配領域化の表象として見られたであろう。

## むすび

唐後半期に財賦の供給地と設定された江淮地方は、中央政府の経済基盤として分節されたが、その内部においては公私にわたる経済活動の活性によりさらなる地域特性が現れてきた。浙西地域の特にデルタ南部においては、南北に貫く大運河（江南河）を主幹水路として各地に塘などの小規模運河が発達し、塩業務機関との連繫とあいまって、基盤にふさわしい経済活動が行なわれていたと見られる。そうした状況下で、在地社会の不安を突発させる反乱の浪が打ち寄せると、経済活動の拠点としてあった都市に豊富な財力を有する有力者が立って武装勢力を形成し、在地防衛を担うようになった。杭州近傍の各都市で勃興した武装勢力は、連繫する各都市間で共同戦線を張って結合を図った。杭州八都あるいは十三都とはそうした集団である。またこの武装勢力結合の契機には、交通網とそこを頻繁に往来する商業行為が挙げられることは

もはや贅言に属するだろう。そして、その結合に当たっての具体的紐帯として姻戚関係が用いられたのであり、のちの呉越国への礎となったのである。

一方で浙東地域の特に山間部では、山間を縫って下る河川の利用があったが、むしろ低地の錢塘江南岸に展開する運河網に主要交通は集約される。しかしこの運河網の東端は海域に連結しており、海上交易の主幹水路として発達することになる。ゆえに一部の山間部商人は川を下って越州などに出て海上交易に携わり、その商機を鋭敏に嗅ぎ取っていた<sup>40)</sup>。また越州節度使となった董昌が福建の陳巖と姻戚関係を構築したのも、その背景に海上航路の存在があり、加えて浙東地域の沿海部に当たる明州や温州・台州においても海上交易の痕跡を見ることができる。本稿では具体的に触れることはできなかったが、浙東地域と海上交易との関係は注意に値する。

だが内陸の山間部では、反乱の浪が皇城などに打ち寄せると居民は山中に逃れて武装勢力を形成した。その特徴は南北朝期<sup>41)</sup>や清末<sup>42)</sup>にいたるまで通時的に見出すことのできる現象であるが、唐末当時の特質として、在地有力者が居民を率いて山間に逃避しかつ開発を手がけ、その結果として宋代以降の浙東地域において比較的狭隘の可耕地に農業集約化が見られるようになるのではないだろうか。浙東地域山間部の個別分散の各勢力は自然の天嶮に雌伏し浙東山間部開発の端緒を築いたが、またその空隙地に流賊の流入を可能ならしめることにもなったと思われる、この二重の山地入植を把握して、浙東地域開発史を考察する必要があるだろう。

以上のように、唐後半期に現出した地域分節構造は、浙西地域のデルタ部と浙東地域の錢塘江南岸の低地平原部に交通網の発達と商業の活性化を導き、武装勢力の連合を生みしめるにいたったが、一方の浙東地域山間部では依然として交通網の未成熟と農地開発の発展段階にあり、強力な武装集団を形成するにはいたらなかったと思われる。

浙東地域を支配した杭州勢力は、杭州城を港湾都市へと変貌させる。それは大運河と浙東運河、そしてその先の海域とを杭州城を中心に連

結させる意図を持ち、唐末まで相異なる地域性を持った浙西と浙東地域を不可分の領域へと結合させることとなった<sup>43)</sup>。それは杭州勢力が浙東地域を併呑する形で進んだために杭州と海域とが連結するようになり、後の北宋市舶司時代・南宋首畿時代を迎えるのであって、そこに浙西・浙東地域の自然環境とそれに応じた歴史の特質を読み取ることができるだろう。

## 注

1. 妹尾達彦「中華の分裂と再生」(『岩波講座世界歴史 9』, 岩波書店, 1999年)
2. 佐竹靖彦「朱温集団の特性と後梁王朝の形成」(中央研究院歴史語言研究所會議論文集之一『中国近世社会文化史論文集』, 1992年)
3. 山根直生「唐宋政治史研究に関する試論—政治過程論, 国家統合の地理的様態から」(『中国史学』14, 2004年9月)
4. 森部豊「唐末五代の代北におけるソグド系突厥と沙陀」(『東洋史研究』62-4, 2004年3月), 丸橋充拓「唐代後半の北辺財政一度支系諸司を中心に—」(『東洋史研究』55-1, 1996年6月), 同「唐代後半の北辺における軍糧政策」(『史林』82-3, 1999年5月)
5. 妹尾達彦「唐代後半期における江淮塩税機関の立地と機能」(『史学雑誌』91-2, 1982年2月), 中砂明德「後期唐朝の江淮支配—元和時代の一側面—」(『東洋史研究』47-1, 1988年6月)
6. 江南の地理的形狀については北田英人「唐代江南の自然環境と開発」(『世界史への問い』1, 岩波書店, 1989年)。自然環境に応じた新田・古田形態の相違に関して、草野靖「唐宋時代に於ける農田の存在形態(上)」(『法文論叢』31, 1972年12月), 同「唐宋時代に於ける農田の存在形態(中)」(『法文論叢』33, 1974年), 同「唐宋時代に於ける農田の存在形態(下)」(『熊本大学文学部論叢』史学篇17, 1985年10月)。また斯波義信「長江下流域の水利組織」(『宋代江南經濟史の研究』汲古書院, 1988年)は土地利用・主要水利形態等によって河谷扇状地・上部デルタ・下部デルタに分類する。また浙西と浙東の地

- 理的形状に基づく農業形態の相違については足立啓二「宋代両浙における水稲作の生産力水準」（『熊本大学文学部論叢』史学篇17, 1985年10月）がある。
7. 政治的中間領域については拙稿「五代の道制—後唐朝を中心に—」（『東洋学報』85-4号, 2004年3月）において華北五代王朝の道制について論じた。華北道制は唐代から五代末に至るまで細分化が進行するが、華南の場合、唐末道制が十国の基礎となっており、道がむしろ統合・拡大化した形で十国は建国された。また十国を経験したことが宋代華南の路制の区域形成と無関係ではない点は注目されてもよい。なお北宋中期の行政中間領域については小林隆道「宋代の広域区画（路）について」（『史滴』25, 2003年12月）、同「宋代三級行政体制の形成—元豊帳法の分析から—」（『史観』150, 2004年3月）、同「北宗期における路の行政化—元豊帳法成立を中心に—」（『東洋学報』86-1, 2004年6月）がある。
  8. 似た観点をもつ論文として山根直生「唐末五代の徽州における地域発達と政治的再編」（『東方学』103, 2002年1月）が挙げられる。
  9. 前掲谷川氏論文、渡辺道夫「呉越国の建国過程」（『史観』56, 1959年）、佐竹靖彦「杭州八都から呉越王朝へ」（『唐宋変革の地域的研究』同朋舎, 1990年）
  10. 『呉越備史』巻三、天福八年[943]十一月附曹仲達伝、  
仲達、臨平人也。……祖信、知嘉興監事。……本歙州人、尋歸杭州為臨平鎮將。八都建時、信因保嘉興東界、遂家臨平焉。また臨平について『資治通鑑』巻二五三、乾符五年[878]十二月条の胡三省注では「臨平、錢塘北」とする。
  11. また『文苑英華』巻八〇八、顧況「嘉興監記」がある。
  12. 前掲注5妹尾氏論文は新亭監を台州にあったとする。事実、台州にも同名の監があったが、ここは塩官の新亭監のことであろう。
  13. 本田治「唐宋時代・両浙淮南の海岸線について」（布目潮瀆代表『唐・宋時代の行政・経済地図の作製研究成果報告書』, 1981年）
  14. 前掲注5妹尾氏論文
  15. 『文苑英華』巻八〇七、沈亜之「杭州場壁記」
  16. 『五代史記』巻六七、錢鏐伝
  17. 『乾隆紹興府志』巻三、地理志
  18. 山根直生「唐末における藩鎮体制の変容—淮南節度使を事例として—」（『史学研究』228, 2000年6月）
  19. 『海鹽縣水志』巻一、地理。
  20. 池田静夫「外港—澉浦について」（『支那水利地理史研究』第六章第二節、生活社, 1940年）
  21. 『光緒嘉興府志』巻四、市鎮
  22. 小岩井弘光「宋代錢塘江流域の交通について」（『東北大学東洋史論集』1, 1984年1月）は宋代における交通路としての錢塘江の機能を述べる。また唐代でも『李文公集』巻十八「來南錄」（四庫全書本）によれば、その著者李翱が洛陽から広州へ六ヶ月かけて観光しつつ赴任する際、運河をくぐり、杭州から錢塘江をさかのぼり、富春（富陽）を経て睦州へと抜けている。
  23. 『唐会要』巻七一、州県改置下、於潜県、武徳七年[624]六月置潜州、至其年八月、以水路不通、州廢來屬。  
また『新唐書』巻四一、地理志、江南、於潜、南三十里有紫溪水溉田、貞元十八年[802]令杜泳開。又鑿渠三十里、以通舟楫。
  24. 本田治「宋代杭州及び後背地の水利と水利組織」（『中国近世の都市と文化』同朋舎, 1984年）
  25. 『讀史方輿紀要』巻八九、浙江・苕溪
  26. 『太平寰宇記』巻九三、杭州南新県条、本臨安縣地。皇朝乾徳五年、錢氏割臨安縣地、南置新陽（場の誤字）以便徵科。至太平興国六年、改為南新県。
  27. 『呉越備史』巻一、光啓二年[886]十二月条には、杭州刺史任命に先立って、浙西節度使周宝が錢鏐を権知杭州軍州事・兼杭州管内都指揮使に任じている。
  28. 穴沢彰子「唐宋変革期における社会的結合に関する一試論—自衛と賑恤の「場」を手掛かりとして—」（『中国—社会と文化』14, 1999年6月）
  29. 『古誌石華』巻二十五、謝鶚撰「朱行先墓誌銘」、

- 府君諱行先，字蘊之，吳郡人也。……始隸職於建寧都，從高公彥所在，征討累有功績。……時天下都元帥吳越國王親統全師，撫寧郡縣，宜加爵賞，遂封協力勤王功臣，尋封佐正匡國功臣，加右僕射，仍委之靜海劇鎮。……有子八人。長曰從訓，耽味雲泉，不樂仕宦。……次曰元晟，節度使正散將……娶諸暨鎮遏使楚牧韓章司徒愛女。次曰元杲，節度正散將・銀青光祿大夫・檢校太子賓客兼監察御史，……娶聞人氏。……女三人，長適潁川氏，西都軍將都知兵馬使・明川羅口使陳師靖僕射之子某。……次適清河氏，建寧都虞候張全尚書之子某。次適上亭鎮遏使翁錫尚書之孫，節度討擊使上亭鎮遏將元昉之子繼貞。
30. 上亭鎮については、『新唐書』卷四一，地理志，江南明州条に上亭戍を記す。
31. 上亭と丈亭に関して，丈亭を錢氏が上亭に改名したと『宝慶四明志』卷十六，驛鋪・丈亭館条は伝えている。
32. 『宝慶四明志』卷十六，慈谿県・水，江源于紹興餘姚之太平山，東來至丈亭，乃分為二，大江由鹹池歷西渡，經府治之北，入海。小江貫県中出東郭，至西渡，又與大江會。率隨潮進退，大江乘潮，多風險。故舟行每由小江。
33. 『吳越備史』卷一，乾寧三年[896]五月付董昌伝，及議立国号，有客使倪德儒，語昌曰，中和辰巳間，越中嘗有聖經云，有羅平鳥，主越人禍福。敬則福，慢則禍，於是民間悉凶其形以禱之。今觀大王署名與當時鳥狀相類。乃出圖示昌。昌欣然遂以為号。
34. 「制東」は「制東」つまり浙東のこと（『莊子』外物篇）。
35. 『資治通鑑』卷二五一，咸通十年[869]五月条に，「（龐）勛初起，下邳土豪鄭鑑聚衆三千，自備資糧器械以応之，勛以為將，謂之義軍。五月，沂州遣軍圍下邳，勛命鑑救之，鑑帥所部來降。」とあり，また『乾隆福建通志』卷二一，職官には鄭鑑が広明初[880-881・6]に福建觀察使に就任しているとある。両者が同一人物であれば，下邳（河南道泗州西北）の出身となるが，確定は難しい。
36. 日比野丈夫「郷村防衛と堅壁清野」（『中国歴史地理研究』同朋舎，1977年）
37. 『読史方輿紀要』における浙東地域の諸県城条を参照。
38. 先学の研究に従えば，唐末五代では流民の移住入植が江南で起こり，塢などの小谷への定住によって農地開発が進展し，宋代以降には特に河谷平野・支谷・扇状地の農業の集約化が見られるようになる（前掲注6諸氏論文，及び斯波義信「宋代の湖州」（『宋代江南経済史の研究』），北田英人「中国太湖周辺の「塢」と定住」（『史冊』17，1984年9月）を参照）。しかしながら本文で見たように，浙東地域の居民による山間入植も顧慮すべきと考える。
39. 吳越国は，むしろ他郷流賊を排除する形で勢力の安定化を図ったが，一方で隣国の呉では同じ蔡賊を黒雲都として編成し，軍事行動の尖兵となり，その勢力拡大に大いなる貢献をした。またこの蔡賊の一派は湖南へと入り楚国を建国する。このように，十国を形成した諸国において流入蔡賊の果たす役割に相違が見られ，唐末の蔡賊流入と地域の受容偏差に関しては唐末流民，十国形成，地域史等々において注目すべきであろう。
40. 唐後半期の浙東地域と海上交通に関しては機会を異にして論じる予定である。
41. 那波利貞「塢主考」（『東亜人文学報』2-4，1942年）
42. 並木頼寿「捻軍の反乱と圩寨」（『東洋学報』62-3・4，1981年3月）
43. 拙稿「港湾都市，杭州—9・10世紀中国沿海の都市変貌と東アジア海域—」（『都市文化研究』2号，2003年9月）

# The Warlords' Formation in the Hanzhou Cities and the Area Reorganization for the Last Years of the Tang Dynasty

Satoshi YAMAZAKI

What does the segmental system of empire in the latter half of the Tang dynasty bring in areas and cities? I particularly consider the characteristics of warlords in the cities of the LiangZhe area for the last years of the Tang dynasty in this report. In Hangzhou, located in the southernmost extreme of ChangJiang delta, the warlords were concentrated by social uneasiness such as the HuangCh'ao rebellion. It was seen in cities putting the salt duties institutions in places which connected with the canal and branches that developed in those days. The warlords tried to comminute with each other and built marriage relations. On the other hand, the organization of warlords was seen at mountains in the ZheDong area, but a forts were scattered. The warlords formed in Hangzhou spread to be based on a strong alliance and annexed the ZheDong area through the exclusion of inflowing rebels, and then the LiangZhe area was reorganized around Hangzhou.

Keywords : warlords, canal, salt duties institutions, fort, segmental system of empire